佛
諧

中村俊定文庫
文庫 18
354

自序

八ヶ峯山の巖下に住を雲溪に求めり
深き谷の中に人跡大親なる奥に
参河の國伊勢の境を行演十三里に出づる
に東南に滝落を流れ雲と一致
に連なる眼界更に冥冥一色雪ふ
ものなくして神峯頂麻倉なる伊勢の
湾しくいかにはるかなる朝熊山三里

乃浦ゟ清しむら氏條宮の間加ふ澗ハ尾張ニ屬す
ちかき浦しハ己のちらし遠きハ多羽の堅
利熊野浦までに往来の舟の用にたつ
大明神 船中風波ノ難ヲ除キ漁ノ事ヲ祈ルニ霊験アリ里俗ハ大織ノ神ト崇奉ル 小山の北の腹
立るを峯の木立し通ふ潮の塵は拂ひ
六根おのつから清浄なれハ捧る民の産六十
まてを鯨網ありし鈎を奪して生涯送る婦は
日を罪を拾ひ藻を採て世を渡る 村長粕谷分家ハ御朱印
ヲ傳ヘテ大網鯨舟ノ事ヲ掌レリ 小山の崎の伊勢路の間僅一里余

尾張ニの内海てふ汐の渡にあれハ
汐の波も今そ蠶あれ 千里の風雷の音す
出入廻船も風待潮時を待りて東浦辺一
の湖ちかく竜の宮岩まて船乃峠声は
寺渡合の沖まて鯨の潮吹あかる岩屋
穴蔵は汐さわりありけれ屏風岩も山
乃腰ゟ大灣の浪ま石世石も浦
みて遥の淀目をひ玉の浪み
詢のよく浪お手に松岩根松流寓

松をみ奉れば馬をはなち給ひ神を
清き流の清泉をみるに御門を出給ひ
川なつかしき宿をもとめ給ひ
の氣に流れ出る鶯鶯細綠地川柳
鶴をうゑ給の濱のうゑ給ひ花鶴を神
の殿下あり給ひ
殿の三尊をうゑ給ひ
和歌の浦を捨給ひ玉藻
をうゑ給ひ
をなかれ給ひ
の堂第の庭儀を見給ひ

故郷に東證寺神領奉免の下文知記す
妹をんあるを岩間をとゝの人を見給ひ
をうゑ雜詞舟をあ
ありをかの代の御の御
下載る所おのうゑをこの
八橋を名をくゝ在原中將の変
宮の御をうゑ
浄土踊躍より
車をなを

[illegible]東海道の宿駅[illegible]石[illegible]五六所
[illegible]位なるべき今を盛りなる格式
[illegible]伊勢参宮の後[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
名所[illegible]の藻屑[illegible]人
[illegible]人達[illegible]
[illegible]恵像（ヲモイヤウ）の四[illegible]述られ[illegible]

[illegible]今[illegible]俳諧[illegible]
[illegible]一句八[illegible]
東海道の一篇[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
蕉翁吟[illegible]
人[illegible]

宝暦九己卯
黄鐘望日　尾陽雨人

俳諧伊良胡嵩

いとゝ淋しう拙し[illegible]

此一章を[illegible]
[illegible]
保義乃宝白梅下[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

前

[illegible]

小春[illegible]

[illegible]

以切りあらそ拾ひけく　蓮阿

われは俳諧を義法師に申し　玄角

孝利おんを枝りまれたる　羽雲

業俳るれ嘆いまし人に　李亮

おるれこ百れ月みる　九蟄

角力場に出ずるみる　太来

稲むしれやふ宜れる　迂耕

郷よ仏会ぬ　ちまれ出　蛙丘

小鮒に待て釣れた後　和吾

十九出角　釣りそふい　湖外

朝桶に波乗りの一文字　松羽

仮法衣に　れて出入　魯帆

うんしやと登りかんれ　松林　朱涼

冬ふるみ寒ひつかり　陳先

月星に役りなく本線の　橋戸

朝霧まよ軒のかい　南湖

紫雲の奥に響く清音
高一重を重ねて
花はまだ開かぬ
秋枕の雖
別勝の痛い二月
陶々の糸
夕暮の空に吹
貸多の糸

駝し
大車
南水
雅歌
墨風
嘉六
何曲
芦有
万中

あるかの工夫
蒼茫面の猛
一軸の乖
宝ケ
命脈
毋れ
初秋
美望の住
ふる雪

世塵
茶花
有法
一泉
大法
花泉
菊也
絶く資の入海
仁の童

文部省を見物する
近交

ウ 情を忘れかねる歩
茶摘

愁思を掃ひうる人をゞ
其扇

立て歌をうたひたるの
宝之

牛迷ふあり根を知るべ
半隣

られてはえあるを和の
旨ぬ

風うるをくらして萱の軒
芦之

一そくでかくおくる行
不及

おそくまれとしてあ
この狂

行らめ神をはなれ
伝恋

ふるをも月をふ
旨文

時は梅をうる野
庭丁

蛙をいとまあつ
麻猪

星めりくわれ
五風

一和をひとうい
狂乃

山を作り
執業

題 ものゝ

蓮の坊

春中ものゝ月の出るを待つゝある
ものゝ孫の乃　松を風　左馨
尚ものゝ貴き貴き行竈（リド）に続て　世有
氣を形を活るゝを喘ふり　了中
首篇を行ふ遠やらるゝゆゝ　玄角
園を時ゆく木陰乃活　加

先住和尚ものゝ住い活世人　馨
今廣ものゝ第ものゝ孫ものゝ　有
近江ものゝ義濃へ移ものゝ　中
非武ものゝ孫ものゝ　角
行ものゝ一ものゝ　有
行ものゝ丁ものゝ少しむく空　馨
紙ものゝ汐ものゝ　加
髮乃中ものゝ　中

[illegible] 角
[illegible] 有
[illegible] 中
[illegible] 何
[illegible] 蕊
[illegible] 角
[illegible] 有
[illegible] 何

[illegible] 中
蕊

菌[illegible]

短冊おり 并序

架[illegible]
[illegible]
了[illegible]
[illegible]

は仕友みなもしるみ看好てしらむ
やゝ元年陸とて老故患ひ
風月の服従ゆるし侍てる伊
勢の海みし蒔を見て角田
みゆきに結び梅ちれ跡を拾ひ
例てかく撰集のめしとゝ題行
宮手人年ふ紙二冊みよす

世有

これてしもうたれ帰る乃人か　子撰

花も見ゆ緑は木しの山　木兕

晴しけり暑き酒のなかまで

春名付るは粋て春なか　百扣

ウ
ち、連ねはいつ迄比も宵は月　東甫

梟も秋のわ中旅寝の下に　栗里

す白は虫の哀とて嘆く　眉華

座敷も夜にん中膝すり通へ　達路

時も流しもつるむ門ちらし　素郎

棒の捌のれ荷中紙筆と　魚珠

おふしの保見なりしけと梅の色　豈石

所へ入てめでたし　山水　非吹
きれ又入のよう侍なくわるふう　禮
おもくうへれ声い　在あ　有
ゆしおちる字をいと和歌の道　拍
拍子もうまぬうまぬ声　四
以前武徒と人うらうらう　吹
身は自ものもれる　華
豊さをなる大勢の彩の名　陰

ちぶちおくりなぬ深叶　南
をうけやをれ内侍今乃世武石　孫
きれるて世れ世大乃之　亭
をうりもむ乃ふ河を昔う　里
国を底乃ふおみて　憂　石

長安の月

揚雲雲みなぎる波
庭はうち掃ひもむる雲掃き
苔門へ出入は庭れれけて　去角

羽墨

雲をしらしやうしらし　一泉
ぬけるまく煙の狂ふ　李亮
水撥うちれ一叶浦の水　左螯

絵朱の屋うち行脚の先き急き　蓮阿
あつちとおもはもつくぬんど　土朱
茶みて下さ茶を清て御植ま　礼
掃のもし清へぬりと行のま　墨
蹄ふ多やうと思へ川と多　氣
一歩ふ行いて百い買い物　角
ぬをちまい茶みみ清をぐ　螯
清水坂うち茶ま　弧も　亮

わたしかやうに書て
師走の市をゆかいさうな
癪病かをこしぬ用こゝろ
出羽こ屋れ　ちゝみ半は
軒へ来宿ーるこれの
鼻のえを庵なし
一体い恨らめ新てよゝ酒
なのをやいろ風を

来
なの
万中
れ
角
糸
元
鑿

星乃和尚花こゝ
なの生乃大蛙あけて行ーー戻
新こゝ用ゝ猫こ恋の痩
遠きをこゝ屋根行
俗世をこゝ活下こゝ日新
ゝ坂ゝーれ柳原
ゝ年ゝ千代矢先こゝ
ゝをあこゝ川乃浅瀬

来
狙乃
甫水
れ
墨
泉
角

祢ぢむ山の秋　蟄
伊のこと仮ぎそん穂みまあぎと　元
うしまれ馬を時ど宮唱り　南湖
名号ちて金ひく　勢湖宿　中
よしも笠上京集おうり　臺
謙体まて　腰八美畜　礼
風やや冬月白ひを時冬　角
おあ乃京所ち移　穀入　泉

名ウ
眉仕ぬ宮命は和　元
祇ふつぎこむ帆け永　蟄
ふ乃今ちまふ高いも美酒　石
酒すし待ぶ茶漬ちら　乃
大門をメ出ちを桜ちを　水
拾ちこうこ京紡布也　地
傘れ書を吟ひ活おう　中
流石（ナスカ）こふ所蝶通ーと　臺

[illegible]

[illegible]

羽墨五分　子禮五、　去角五、
一泉五、　李亮六、　庵蟄六、
蓮阿四、　士耒三、　万中三、
狙乃二、　甫水二、　南湖二、

八分未詳

竹林下連
甫水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一表[illegible]

子禮　大法
亀六

九日うら屋お行乃添と新　東洲
芋乃葉の中に捨て　牧葉

うら屋吟

菊里下
不去菴連
魯帳

朝寒を抱ひ乃羽合
人乃ちを絡も花もろ　羽孔
春風むし一ゝ京を筆乃行　蓮石

乃ふ春乃うゝ乃ふ　采涼
春乃を知ゝ　雅光
曾ゝ乃葉ゝ　松羽
瀧乃音ゝ河の庵ゝ時ゝ　柚林　洲子
盥ゝおろ世ゝ胴ゝ　帆
素ゝて江ゝ庵下ゝぬゝ迄　涼
雪ゝ乃ゝ　見ゝ　不　光
音ゝ葉ゝ倒乃枝笠　羽

虚実自在乃風に青柳　予

此度撰集におもひ立けるを
彼乃阿弥陀をたのみけるにこれ迄
りけるよ

三のへ保美邑
白梅下
今はたれ宿る門や伊良湖崎　路斎

春はまだ浅きに晴て富山　子礼

梅乃枝八寸に月も有りけり　冬舟

扇ならぬものゝ側に眠かな　李三

法名も寒き月見も有る事哉　乞柳

大原ゝも低く月足　稲相

小出の年ふれ日南乃春やあらん桃　理筆

つまりし宿の花の盛の花塚　洋
　　　　　　　　　　　　　壺

春

美しき浦乃見物や浪伊良虞崎

三刀屋中垣内
為舟

千鳥なく子等の羽つゞく　子禮

さし出て清水乃露乃露ら行て　舟

勝れ出主る　時に讀よか　柳子

さ河ゆりや思ひを語る月の影　四朗

虫すゝ捨子となで父呼ふ　舟

表

三乃国岡寿
令花

凧の手鷹にならず紙ぬれ　井

望り陽光の乃み山麓へ　子禮

さる人の一日桐葉れ大になくて　疎老

千とフシカこや鉢の唐鶏　坡柳

弓張の影を蓬子より明あり　竹布

捨を忌よ母れ子つゝ　麦甫

同矢作
麦甫

表

霧子落乃羽縫しかるら三さ化

年木さてもたて傍よ宕角　子礼

いつしか中てもたをる枝ゆへ　竹布

こゝよ歌をする法師一枝　雪坊

今の世を田舎なれし京住　孔

たゆり行者を深あはせて　甫

ちりそめの桜はそれ程　坊

南の山を見越す　菓細　布

春の花の色はそれ

花のそのおくあ一樹の山　孔

世代を薫れおぼすて　菓磨

美でもうわは事の家　巴邑

為振ひかを文て薫れ　麦路

後の庵の詩　九郎

之巳二川歌
杜多

人の家を買とて家のこゝろを
雅席の花の一枝を巻奥の
ぬしよりおくられける乃後後
日不　麦路

家居うむしをを貸ん朧月

一紅葉　むめ子　伝　兼磨

春風に吹解そめて　杜多

今朝は武蔵の桜哉　巴邑

粥よりも訪ふ客の遠かりし　九湖

蛙も掛ふれそかいやる　蓬丘

蹈青会連
掃戸

樹蔭や今吉野いろ〳〵の時
鼻うつゝ窓に下やゝ子れ
窓人の吟子ゆ乱れも秋張て　芦之
笠ゆ掛を掛る掛乃塗合　多好
世ゆ月ゆ月ゆ清し留　芦有
葉萸乃枝折掛乃枝折　星之

十句題

花の醉おさまりやすき遠歩哉　不及房五由

うを漁れ茂り山の孔

鮫坂の大木に雨ふる　丈和

下ぶれもうつの新ぶつ　宛十

漁舟もれ出ぬ桂の

はるとうつるうをうり　巴之

撈歳のうるを庫裡のあれ　寫六

迷ひて海ふかくうつる　温人

名月もまこと金あつき　麦飛

海鹿の姿ぬれ蓑牧奉行　杏雨

この笛

放屁　七言　眞伯葉

白章の奪れたらをめを　法狩のをらをきをれあけるめ

鉢とり奪ひ出ぬ　鶴と住れ御牧とる

伊豆相湾眺望

岩ゝ清伊豆神乃支　尾崎下　桂人

小芝居はれはをるおとこ
あるを吟味いろ〳〵
繁京ゝ家ゝ白かいつゝ
ゝ

風葉ゝ清乃もゝ見ていとさまの　門　立和

伊豆相湾仰ゝ　門　移平

ゝ羽乃窠へ切ゝ　門　久田

一声を伊勢て　門　川雲

ゝ　門　上原　巳石

伊豆相湾眺望

岩ゝもゝ伊豆相湾　三浦田原　如石

暮石ハ山浦乃石蔵ゝれ

折ゝ無清ゝ白ゝ　門　国府　泉角

青ゝ清て二見ゝ　ゝ清　ゝ

大神神ゝ清ゝ山業の
ゝん　ゝ

ゝ塔ゝ白ゝ

伊豆相模寄合所詠の吟

[illegible]詠れし月の境や恋塚の浦　保義邑　路喬

詠れし名残や[illegible]　冬花

[illegible]乃重[illegible]や詠れし風石　口　[illegible]柳

[illegible]詠れし小山[illegible]　亀山邑　移朝

[illegible]乃岩根の松や[illegible]　口　理笙

詠の[illegible]　口　李之

各所詠

[illegible]詠れし[illegible]の書　万中

詠[illegible]知[illegible]樹出る　南湖

風れ[illegible]や月[illegible]一川　狂[illegible]

奈[illegible]知[illegible]や詠乃[illegible]　一勺井　桂葉

[illegible]詠れし初[illegible]や[illegible]詠の風　ヶ年　桂玉

[illegible]詠[illegible]毎[illegible]軍[illegible]小乃上　狂乃

東武

春の山や小雨の後の花　文東

春の雨ふりかゝる出立　文井

朝雨の美濃より出るや　朝宇

春の雨ふり葉ゝ禁ずる　花涼

春雨や本末ゝ雨の分　青朝

華ゝ初雨ふる松風　理玉

雨ふるの氣度やあつき故花の内　伯葉

附雨ふる淋しさ　白牡

新雨や蓑の栗ゝ雫　旭星

背折て犬の名ゝ呼もめ雨ふる　帰夕

ゝ今も綾尾の雨ふる　蓑至或四

喰雨見送る雨の朝霧　雖叟

雨を見て行ゝ雨ふる人中ゝ　百杓

芽水を人の雫ゝ雨ふる送る

ふる雨ふる雨や雨の道乃奥　俤呂

雪降や人ゝ羽織の有ゝ丶　普東

大名を笠雖ゝ雪みゆ中山　聖虹

雪丸月乃更ゝ寒さハ冴ゝ　楓京　（参横須賀）

は雪丸次雖乃恩や繰ゝ　この笑　（三ノ大表）

雖おつゝの雪まゝふゝ花聖山　千雪　（自然）

冬月を知て乃みれや雪乃華　吾鶴

初雪丸ゝ犬の張ゝ　美中

美ゝはくゝゝ雪や樹ゝ　雪本

ゝ丸雪乃訪や伊丸相乃神　送り　九久良　（三丸和邑）

おゝつゝゝ丸美雪やいゝ清　麦里　（折立）

日和ゝ雪も張ゝ伊丸相清　喜平

雖ゝ乃美雖ゝ縮み雪聖山　車仝　（牛久保）　（吉田）

雪丸月乃咲ゝ樹むゝ　芦留　（下地）

風ゝ雪ゝ森美や雪丸ゝ　李宋　（尾山侍）

少捨ゝ雪ゝ金所ゝや咲ゝ　有耕

陸奥の国みちのくに小夏行　濃州久々里　海宜

わすれむとて夏の月見に風の中　麦伍

夏草あるあの翁夏もあり敬生会　尾ノ国伊勢　露狂

夏の月見ゆふべ馬ひきかえる　近吏

美うしてうしろ人もある夏の野に　恒卿

地獄ゑ書細めてある夏の夜に　伊也

ゆうべ見れば蛍の夏の牧　芳文

足ちゑもまみゆる夏の野に　芦之

ゆゆしきゆふべ夏の野に　杜皮

沈一斗雲井ゆゑ夏の中に　朱涼

大名の国妨夏ぐる夏の野に　陳兎

新夏花厨の新うゑの水　洛外

永日や雲雀もゆむ夏の中　伊曲

芋雑ゑ厨もゆぐめる夏の中　阿素

山の夏の夏や伊吉の生ゆ　子芳

まれ窟り飯食ふ尾花　青司
糸芒ぬ蓋り出る月や朧月　子之
芒特や蓋ふて細れ乱る　李亮
芒特や的を言へり言み蓋　一泉
蘿を乱れ紙り乱れて松の音　九鼎
窠り通ふ芒れ乱れ雲み中　去角
芒れ眼も乱るる花の蕾　買李
帳り化ふ芒有りいと淡　伯房

世重芒の吟

新芒やまだ細め一みもぬ先　蓮坊
樹芒や寒る寒る痩る時
屋根に寒ぶ小芒特
月恐乃酒屋る物ふ芒哀れ

いろ〳〵蓋菊伊兵衛様り芒乃
吟を生一ぶしを今や
そ芒坊ふれ芒乃尾和様て

[illegible]

[illegible]

松岡下　川子

[illegible]

[illegible]

子禮

[illegible]

保義社畢　河去器子　義

梅樹を伐ん　保義の星　白梅下　路喬

[illegible]

捲いま考社義や冬ゝ夏　冬華

[illegible]ある冬の花　奥移
[illegible]　亀山　移朝
折ふしの[illegible]冬の[illegible]は　李三

白田邑　社国の雨乞を見て　苔

[illegible]ふる陽の家や細村
[illegible]井の名ひろ松を珍る　庵川
山[illegible]の解て涼る　麦窪

[illegible]入姉の[illegible]　初夕
[illegible]の[illegible]や菌特　麦志
[illegible]を[illegible]　菓富　[illegible]
[illegible]　細　松姉
[illegible]　折立　[illegible]作
[illegible]の時　尾[illegible]賀
[illegible]　細村　如東
[illegible]の細むら　星雀

田家　訪杜国紀行

翁

さくらかりやまよりかへる新法師

鷺乃巣も見事や神乃宮寺　如石

滝乃音きこゆる頃く夕くれ　浣水

剣打乃一枝白し帰り花　魯人

桃打のまきれ縄も氷を割　牛語

清汐や夜舟を待子まゝは　乍宇

山姫乃姿も磨て花柴かな　雨枝

鶯も声て冬枯乃ちまき捨子　至志

冬のうらゆ沖の留りく須戸の浦　為之

炭竈や埋く紅葉の雪　若代廿

滴寄ともえて浮る丸雪かな　東雨

椿の花二夜に咲かし　兎向

半舟に東家れ山路の高の雪　寿二

吉田越人をとふひて　翁

寒けれどふたり猿楽ぞたのもしき

若かへる顔寒き猿楽ハ　四時庵連　小菜

はさる詠の手も棲で猿楽ハ　芦留

謡ふて年よし寒きを猿楽哉　民戸

朝霧の若さも猿楽はむしさハ　達比

昔言をふとんに猿楽九猿ハ　芦若

猿楽もん花のゆかりも　只川

下地

杉葉(ゴ)を捨てゝ拭ふる寒さ哉　翁

そもそも往の翁伊賀の胡家の杜国を
君のすゝめに下地の茶店に挂し体失
此吟をとゞめし猿楽や今や此地
の風雅の眉目として栗雪山の
境内に石を建句を彫てそれの
若者のおりよもなく深猿を
むかしせんせをゆかりを正風の
継続のゆかしき猿楽の誰かいさゝ哉
せつ秋にゆかりへ○の　不抒園

下の若ふ乃自在や今もゆかりも　李東

国府

陽光は紙子の外　茅

二見乃みをの大宝山乃境地の句
碑を建て人吟して陽光塚と
よを真蹟を木枯らし京形
ものも

陽光乃ふ一ふる梅の香　茅枯
紙子捨て人を思ひ出す時　少年　春扇
扉の人さし果を感ずる外　少二

芭蕉

紙子着て捨ては笑ひ小春哉　芭蕉
つもれば花ものを捨ひ蜂　子孔
蜜吸ひ獄アを治へ出ることを　支二
ぬれ口乃ふを吸て孔雀　鶏角
まぶをあ先ん月の文業師　花漢
ものを笑よ　湿捨　兎由

風来寺

来り見る岩吹とぐる枝の雨 義

晴

風や又多賀の一二月 白糸

眠り覚る山のぬくもり 子礼

ゆ雲の松を包む若葉哉 何紅

蛙で雪を見てみる中 不石

弓張の新月の雲の間 拾水

たを過ぬ人の数の多 如東

風や吹て月の痩 何紅

ま引や日の暮る猫の声 梧水

風や山の雨ま海へ入る 不石

涼しさの新や峯の夕茶陽 尾張に賀 如東

作油

夜ゝ月清油をとりて来る水

子規少く来て山ゝ　冬星

ゆゝ月乃水なくまき黒　魯橋

暮ゝ来て庭をゝ〻ゝ　不京

夏新をとりて清水　令十

もの清用ゝ窓ゝ　東上　梅星

家物ゝ月ひけこゝゝ　源口　望石

海苔ゝ月ゝ初めつゝ　東京口

園乃来ゝ物をゝ　後ゝ由比　流水

藤川

ゝゝゝ之河ゝ月ゝゝ

警一羽ゝ〻ゝ　牡　赤山下　木鈴

来ゝゝ苔ゝ　星　九琴

今朝を先きてくてみる拾ひ　序草
和乃もや臘乃涙の月ぬ時は　茶丈
花星り時くくうく又まとかく　白金
和のむやふを西ぬもめぬ孔は　風二
寄ぬ門を出孔うり夕涙は　茶文
一ちう二度乃時あり　杜若は　花逸
を中う拾ぬあり事やを　星考

吉良庄

笠寺

ちりぬの園なくんを時ふる　翁
山度ぬを一あり　星待　二滴
雲ぬ寄ぬ今朝の好は　夔勢
ちりをぬを牧をを　横須賀　枫京
星待乃名をうくて孔は　星雀
山道乃名やふを孔う　塚は　茶朝

熱田

とぎなをす鏡も清し雪の花　翁

何とてもけふへさそふ山さくら　五音

そらしぐれかえる川ふるやなきかけ　墨中

けふまてはまて不足なき郭公　乙呂

吹和ぐ風も男や冬かまへ　嵐牛

江れ底まてとおり付るあふさ　暁羽

笛よまつ雁かれて手て火縫ひ　鬼牧

住むさしひさしの連子花野かな　素隆

音ぬる里や夕錦も茶の団　馬山

神おくり山も諫乃道さそふ　杜良

苗代やおおのつましむ水の底　棟蕉

余興四季之吟

春

雪を乗せて枝ゆ初るみれば　不二菴

木の芽をはぐくむ春の眺めかな　米布

泥(ナ)垂宮に添う新芽堤かな　東濃八星　海宜

朧月に従て明る柳の葉　弓文

初春や毋の化粧屋　三兮

朝晩をむすぶ霞の帯　大兆

時を待て花の咲堤かな　魯帆

雪の実笑入る春の音　朱涼

揚風の多き風の紙鳶　蹴兎

泥を垂水の雪くや紙の雫　泥外

雪の八重垣つくれる初音哉　白兎

側へよれば遠さる霞かな　芳有

暖このうれもたもつ木芽かな　揚戸

春若みなとあるく汐干哉　宋見
おもひ子を一日風のやなぎ哉　児哉
さもあれを園も梅の里あり　本仝
山ちを行ふもあれ初ふく　芋玉
小春ひの白い行ても京　湖同
春りかてれ留人もあり晴の梅　川子
ふりみ水もにごれ梅月　湖文
ふるる春入る春はおもふ月　化石

春ちかふ白張を寒梅のむ　東武　文東
元山の梅ふ笠ふさふ　仙宇
笠ふ初春ふ梅ふ所　山城八幡　以足
梅ふ花ふ枝ふ梅ふ　奥羽仙台　九図
元ふ孫有ふ梅ふ　越前福井　一及
小春行ふ返ふ藤の花　三国　巳浪
梅見ふ出ふ春ふ笠ふ　美濃久宇　変伍
梅の出ふ時ふ出ふ涅槃ふ　大京　不白庵

耳洗ふ列をゆ玉の緒 イ 明知 軍本
阿光れ光れ出る宮 三良矢作 麦甫
盃を流を流て行て 行布 イ 中埴内
酒ゆを飲ゆ新酒し美のも 美乎
谷庭へ今日は足を岩瀬躅 イ 二川 杜多
酒下話れ実を入れ有り採物 イ 麦路
なをゆを壊ゆ撫ちむの中 イ 蓮原
つれ場やとつ立つ立つの原 吹海 寺前

恋問を辞御をゆを世ゆ世 イ 凡多
奉れ凡ちを御て茶つを乳 法師 本吾
事れ問を言葉いつれ波て 子礼
書面を縁乃中けれ巌を 五由
告信を風を風と笹を板戸 杏西
相合の垣や中ちりて桃の宮 桂子
凡の人を壁中を揺れ 鳥六
四を先奉を耳を餅 宗十

山茶花を賀(ニセ)する世有
地況(ハヒ)ハ人ゝ(ヒト〳〵)の(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ田螺れ眉華
蕎麦を(ヒ)ゝ蕎麦の為雲之
花をしたはく蕎麦に蕎麦仙翁
笛乃蕎麦を(ヒ)ゝ沈丁の臨月青牛
陽炎ゝ(ヒ)ゝ出る軒乃乙鳥正風
を此絵ぬ(ヒ)ゝ嫁菜に勝(ヒ)ゝ沿道
花を此外を柳ゝ埴ゝ狙乃

笛を(ヒ)ゝ蕎麦に月桂翼
今朝ハ海ゝ(ヒ)ゝ月蕎麦に禹麦
探(ヒ)ゝを(ヒ)ゝ祭中柳に去角
人を(ヒ)ゝ菓中ゝ(ヒ)ゝ根に九鑿
裏山ゝ(ヒ)ゝ裏此(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ蓮掘一泉
(ヒ)ゝ(ヒ)ゝの珍(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ掘に李亮
美人を(ヒ)ゝ汁の味ある(ヒ)ゝ虎の尾何曲
市人の(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ蔵ゝ曾妙

絶てゆくや雪柳　外旭里

おぼろ宮も出るや義士　九人

山先づ白の絶さもさびさうり　葉竹

あ梅やいくつ咲れ咲き　蘭長

白魚や山をまつりあつる　湘吾

消り江れえよ恋しや去の月　賞来

月丁の江消らす　一方中

一月ゆく丁の江や　絶しあ　軽く

若鮎や乳母蓼ゆ　の狂

あ毒ひ一れ月の法の係　南湖

ゆく春や堤を桂毎ゆ　東水

ゆ丁よも流れ春や　羽墨

夏

絶春や登ちとき　也有

ま隠しよあり南の　左甫

登新山毎日拝る所の峰　眉華
至十日の入山や雲れ峰　旭星
夕ゝ如ら孔も浮世の一さわり　楽雨
ゆゝ書く表ハ立ちわけ　不二
朝孔月の係よくまゝ暑ハ　暁吾
乗のゝ山つ月　善東
拝ゝ日ハ雲ゝ月ゝ拝ハ　雨麦
ゝ陰ゝ大事ゝ山　乗見

投雲孔ゝ多わ生ゝ　ゝ孔
ゝ水ゝ指人乃ゝ　ゝ牛
ゝゝ孔寒ゝ瓦ゝ孔ゝ　拾裏
灌仏ゝ孔ゝを稲ゝ涼ゝ　帰夕
新暦ゝ猫ゝ多ゝ人ゝ孔　孔
指ゝ孔ゝ拝ゝ孔ゝ蓑ゝ　孔人
茶指ゝ青羽乃孔ゝ孔ゝ　一兎
深ゝ孔ゝ縫屋乃水ゝ消孔ゝ　雨夕

西行法師の歌に

涼しさを帳に残す人丈（ツレヅレ）　玉吾

庵を連れる草枕　ナルミ　青甫

宮一夏の岩い心や行く春　東武　雪の翁

越前福井

この椎

猿蓑の肩を刈りや　文京　紀蘭雪　永洋　麦雨

豆腐や鍋を分ける事も有　三ノ大京　不出庵

風蘭の枝に残る蓮の莖の形　三良二川　麦洛

ものよりも清れ出でや初花　杜国　（矢作）　乎布

一文字に行き暮れぬる紙帳哉

待つもうるさしや　杜宇　麦雨

月の雨に仏の笑ひ給ふ　（中堀）　為丸

海流石荒れけり

月に雲の雨を降りて大井川　万中

夕顔に咲くや廓を化粧坂　甫水

下駄を書きもうるる相撲　牧人

五乃伊達之事ニ登世田橋ハ　長泉
寺橋ヤ柳ノ森乃　松ヶ崎　大東
浮世乃中をめけうち花あやめ　不及
籠ノ鳥めあるとうるさも時ハ　ゑれ
タくれを仕舞ふ行ノ　松の風　大和
白雨ヤ拍子ぬけノ傘木履　五由
焼け茶をぬむしちをまて浮ハ　の留
恵ノ蝶乃囲ふ乃れてゐるヤ今ハ行　乃壽

登新ヤ元ハ箱ヨリ　時ツミ　春狂
拍子乃出ヨリて来る　拍子　猶
新ハ付ふ乃ヨリ　初春ハ　魯帆
中ヨ之ヤ天ハ恵ヨ　伝ハ昼夏　朱涼
うちすれ扇ノ　わまる暑ハ　濂光
むちよ乃れ　ハ清ふ乃ハ　蘭長
登新ヤ浮氏ノ　清ちもの　去角
蝙蝠乃登ふ星ヤ　木下ヤ　羽星

取敢ず夢の覚れば紙帳に　素堂
青梅や京の噂の多き時　一系
涼しさや手伝ふ人の松の新　九蟹

秋

蛍一ツ出せば出せば一ツ来る　伯兼
朝顔の咲る日数を数へ　化光

取敢ず夢の浦尋ねて蛍　世有
九月十三夜雲に隠れて明る星　雲之
月の猪の子連れ立て行　百枳
星の京嬉し嬉しの東　園士
蒸し水ふるふるの川　禹麦
徐の子の白下地や初月毛　松羽
名月に又見る日和山　魯帆
月の外鳴る音寂寞　朶涼

[illegible]　瀑布
[illegible]　泉水
[illegible]　普東
[illegible]　雲虹
[illegible]　[illegible]
[illegible]　乘見
[illegible]　湯卿
[illegible]　竹英

[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　五由
[illegible]　茶摘
[illegible]　其芝
[illegible]　麦雨
[illegible]　竹布
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

星合や神代の庵もかなる　神祇　麦浪

法わけく山入の山ちかきやみの月　杜十

夕照りの雲こそすゝの涼しさ　三良吉田　芝若

時雨降る滝の水の音清し　達比

新法師をゆくてうれしい瓢哉　二川　杜多

軍人や出征夫婦も笑まゝて　麦路

涼しさに風こそ来れ九郎　九郎

山法師ゆくを川の石伝ひ　保美　路考

蓮の葉茎折れもあるゝ大根蔚　冬華

蓮の葉茎也垣の朝あをを彩りて　〃　〃

木槿の今を盛りと咲て庵の前　田原　麦之

清しを拭ひ水もるゝ出の声　芝代女

木兎をゆらして眠る昼の小屋　東雨

草枕や男の知恵も霧の出え　如石

毎の名を月の三ツ星の星の恵　三ツ大系　不為庵

蚤を見て清しを少出る　全

盆すきてきく出洲の蕗作　越前金津　素六

蟲まてちきれし葉も蕗に　信州飯田　桐羽

涼しさも淋しき桐の一葉かな　東武　文井

角取ハ勝けくも君の康の声　武州鳩巣　押几

豊年の穂ゆたかにて野ハ　一円菴

夕月の露に乗乃杖つく雲山子に　蘭長

風冷り鳴らすに淋し詩持　旭星

足音もなき隠れ笠さて木の下に　淵吹

十六夜やくれ行く墳をふりかへし　九人

聞く時も蕎麦らつく桔梗哉　至盞

ともし火を入日の気れや魂祭　桂裏

きぬたや庵て唯独れの月に落　吉生

一すちのはしかけ下乃旅も野に　五風

稲妻や雲山子の梅をさかせ　万中

雁鳴やさらくかんとさて中と候　乾之

秋深き此ひしこや落し　二橋

かしまの風を送りてうまうぐ　南湖
むらの永日を雨よりえて月つんゝ
百貫の裸を抱へ角力の郷　蒹葭
試み月やをとこの乃きうん　迂耕
十六夜や酒瓶二升よ月を周　羽墨
蓮飯や再び白いもじうけく　青元
新田むら村張や苦みむし　九鼎
東山ふるふ波と山やりてや波の一泉

春月や人を世界の座よりなれ　ゑ孔
かしこの外の春の雨や野し涉　里之
涉を花の外に柳樹　芳有
伊乃神の外の貸や野ふかし　精戸
蛙蛉や羽ふるて長き水のと　貫東
多代の名の世を襟付や蒹葭　去角

冬

世の中の塵やつもりて雪の山　蓮石坊

蘭の葉の白むばかりの水仙も　木吾

おしなべて雪をかぶりてもみぢ川　出来

梅の香や風のひびきの春の宵　禹愛

情ある弾琴の寒の夕　李元

雪の中の山の里の一夜酒　魯帆

痩肘を雪のうちにやなぶるらむ　松羽

立てうつ羽をはめうつ暖炉　朶涼

世の中の酒の肴に蕎麦の花　濤兒

炉開の今ぬぎ捨てし時　猪戸

捧ぐるもうたをうたひて炉開　壁軒

元禄や海の上に陸の上に　方雄

ひらけすぎる財法をみやるかな　茶猪

陽炎に今年の春の夕　芋有

[illegible]の花の色　旭里

二度乃[illegible]海[illegible]の葉乃落葉　[illegible]人

[illegible]沢や宮[illegible]を[illegible]　蘭長

初秋乃配[illegible]　[illegible]

来[illegible]待[illegible]　[illegible]

[illegible]　再[illegible]

[illegible]　也有

[illegible]　信濃飯田　羽羽

[illegible]　ミノ大原　不[illegible]庵

[illegible]　[illegible]田原　麦二

[illegible]　東武　[illegible]涼

[illegible]　奥仙臺　[illegible]

[illegible]　加賀山中　[illegible]文

[illegible]　伊勢山田　[illegible]十

[illegible]　三河中垣内　[illegible]舟

[illegible]　[illegible]　竹布

しられて落ちぬれてを落葉哉　麦南

春はなほ語らぬ顔の山もとも　下地　李雪

うぐひすの枝をあるいて落葉哉　牛久保　宇葉

ぬれまくは洗ふ乃河の水の音　万安

波ヶ乃園ちかくうつるなと
やはらぐれんぞ今橋乃園や
せいせんの川辺をうつるなる
乃あるうちはもとゆきなる
てもなるひぬ

竹彦うち出るかもひとはなる　高　を流

化て出る栗原もちまて柱野哉　二川　麦浦

子細うしうの京や初しぐれ　牡丹

炭うりや翌は寒さも至哉　知多大野　巨扇

洛東三十三間堂にて

之張乃矢ぬきてやまぬ音　万中

あるまも冬ぞ冬ぞ冬の柳　松く

ぬるるにて清水　素の　野風

るうれて水に書てる水に　南湖

猩猩もなきてうらむる山かな　其扇
寒さあまりなきてうらむる山かな　丈和
形ちをかくれ隠れ枯柳　五由
行人の下駄音ひゝく寒さかな　麦雨
水をよりつゝ月くる山かな　巴之
文科ちれ化粧やみの月　去角
隠ちれ和歌ちれ哀　九鼎
落て行る野ふしやうの舟　羽墨

ちりちりや世ちふる風ふいよる猩　一泉
金松ちてゆひたる紙ちり　五風
名ゝ付ち新ちなる巨燵かな　狙乃
出産ちち先神棚ちれる　猿裏
乗ちちる時ちて　冬　吟　三壺
休もあちてまれ茶乃ちちれ　子禮

朝顔やうき世の夢はかなさを　南空

海和尚の句をみてその面影　明之坊

ふるさとの水もかれて　はすの葉

風のみぞ蓮の葉ばかり　昌房

杜丹の色衰へて　冬の花　ミノ長良

笛の音もかすれ　川向ひ　素風

もゝ実も落て　名残の梅の実　呂杯

生きては八朔の粽流れまくらの
泡雀をせき出す粽舞ふ夏の道
ながれ人のまれ〳〵来ける　枫花楼

馬六

沈沈と入て来ぬ伊勢の月乳

夕粽乃花の粽せ　　はる子

酒の酒せい　名乃樂　呂翔

市内ぬむ　麥曲

ちらちらぬ計も思ふ藏の拾ひ　白朶

まさしくみしらぬ所を　千甫
海士乃釣舟　宇下
なれぬるとの猶うらなし　出二

各詠

世をうぢやまの雲ぬけて　馬六
嶺や春ふかしなれて　呂湖
ちとまをよこの月と　出二

こよひ月乃清かなる　千甫
ふるさとの秋の初風　左所
歌落葉赤山や紅葉　九来
行しかの人をうらぬ　事拾
眠い目をけさもそし　文和
杉風は清ふかしなれて　麥西
風ふく秋の夕暮　白象
梢の月ほうもきぬ　宇下

ふるゝ人石ふみしてつけやま　梅　小方　五竹坊

十六夜や紙屑乃捨る梅の先　岐阜　蕉坊

あれたる夕さひ隠れ家乃蔭　友帆

埋火や古狂乃人乙来す　卓五

春乃月乃元ゝゆく今朝の秋　東岐

春の空うみ眠る小舟　芳麻

懐紙四

享保甲辰二月廿日辰湯乃箱
十論乃虚實ち貴あり乃ち口
宵祖ロ有ハ帰ル

更衣乃辰ちとゝらしを別ル　蓮二坊

咲乃ち乃一る土舟ハ一本　杜国

丁全や悪魔乃天狗を祓ふ者　鉄人

樹春や野山乃芽ふいそ　六ゝ庵

用ひ冷ゆるはしやこしみ川　文喬舎

大名みの梟おのゝ駅しやみそ梅　芳風

初春みの一夜とゝまりや　岑みの松　直素

金閣寺にて

山しやゝ沈り落葉金閣みの新　仙喬

名古屋にて

金鯱の雪とつゝまれるかな　仙臺　芳水

跋

満田川めぐる都のゆふ月

三笠山より見とりてこの宴に

ものゝ心しれる故国の

情のふかきやまゝ雅なる

三湯伊豆の頭俳諧の新ちる

仁軍は產をうんでうれと
屋原より出でめ今まで世と遠
ざかりうの清稽は遠生あり
今年も積み松の風をうの
窩より河角のあり表法たく
世一集は久しく心を在れ
ずと說くをよし舊るの

事蹟をまとめて風雅の實
をうて四海里の佳境をたづね人情の
虛をあらはしつくしても再るう
謙あらい錦をかざして表行に
見ふるすと類を選集をもとめて
世をあらはすぬ和軍も亦れの
余光を照されて溫故知新の

新と称春来に逝るのうらみは
霜と意まれのく

己卯仲冬　去角

乐古亭
春